

---

# 詐欺には気を付けよう

いーやー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

詐欺には気を付けよう

### 【Nコード】

N1817BA

### 【作者名】

いーやー

### 【あらすじ】

ある一人の男が3つ願いを叶えてもらい転生した。

しかし転生するときに記憶を持ち越さず転生してしまった。

これは望む望まないに限らず生まれた時からなぜかチートな能力を持って生まれた主人公の物語である。

ご指摘やご感想がありましたらドシドシお持ちください

## プロローグ（前書き）

もしかしたら転生者アンチが少しだけ出てくるかも

あとなるべく原作キャラアンチはなくしたいので、もしそういう表  
現が出てきたらお手数ですがご指摘ください

PS・作者の嫁はバゼットさん一択

バゼットたんかわいいよバゼットたん  
間違えて短編で一回投稿してしまった

## プロローグ

「あれ？ここに」

気が付いたら白く何も無い空間に居た

周りを見渡すが誰もいない

そもそもなぜこんなところにと？と思い出そうとしても今日一日のこと  
とがまるで思い出せない

昨日以前のことは普通に思い出せた

おかしいのはそれだけじゃない

明らかな異常事態なのに焦りが無い。すごく落ち着いている  
そんな風に状況を考察していると後ろから

「貴方が今回選ばれた人ですね」

驚いて振り返ると、神々しい雰囲気を纏った女性がいた  
少し見惚れていると彼女は首を傾け困ったように微笑み

「えっと、もしもし？」

その言葉で我に返り、

「あ、えっと。な、なんででしょう」

しどろもどろに返事をした

くすくすと笑われ顔が真っ赤になるのがわかった  
彼女はおかしそうに、ごめんなさいと謝り

「えっと、あなたはこの度、私たちに選ばれました」

「選ばれた？」

「はい。貴方は転生することができます」

え、転生って

「俺って死んじゃったの！」

「あら、覚えてないんですか。けど、そういう方はよく居りますので大丈夫ですよ」

「いや、そんなのんきなこと」

「それに悪いことだけじゃないですよ」

微笑まれごまかされそうになるも、今度は気を引き締めることで騙されないように気を付ける

しかし次の言葉でそれも吹き飛んだ

「貴方が転生するにあたって、3つ願いを叶えられます。まあ、私に叶えられる範囲ですが」

まさかのテンプレきたー！

「え！ホントに！」

「ええ、ホントに、です」

やったー！

まさかネット小説なんかでよく見る事態が自分に起きるとはなにを叶えてもらおっかなー

なんて考えていると、ふとなんで俺なんか選ばれたんだろうと疑問に思った

自虐じゃないけど、本当に普通な人生を送ってきたし、特に取り柄というものもない

何か特別な善行を行ったわけでもない  
疑問に思い彼女に聞くと

「ああ、そんなことですか」

何でもない事のように頷く

「貴方は1年前に道路に飛び出そうとした子供に注意しましたね？」

そういえばそんなこともしたっけ

むちゃくちゃ緊張したけど

「詳しくは言えませんが、その子供は未来において重要な役割を果たす人物なのです」

「ですから、もし貴方がその時注意をしなればその子供は死んでしまっていた可能性が高いでしょう」

なるほど、それが評価されたんだな

彼女を見ると肯定するように微笑んでいる

たまにはいいことをしてみるもんだな

「あ、あとひとつ聞いていい？」

「なんででしょう」

「転生する世界って選べるの？」

「選ぶ、というと？」

「あ、えーっとき。例えば漫画とか小説のような世界とか」

彼女は得心いったという感じで

「ああ、それですか。大丈夫ですよ」

「世界はそれこそ無数にあります。それこそ漫画のような世界も」  
もちろん限度はありますが  
なるほど。あんまり無理はきかないってことか  
なら

「じゃ、じゃあさ。それも願いに入るの？」

「いいえ。入らないから大丈夫ですよ」

内心ガッツポーズする

「じゃあ、ISの世界。インフィニット・ストラトスの世界に行きたい！」

彼女はしばらく何かを考えるようなくさをした後

「大丈夫なようです。といっても、それに近い世界ですが」

「よっし！」

思わず声に出してしまった

彼女にまた笑われてしまい、赤面してしまう

少し落ち着くまで待ってもらい、その間に願いをしっかりと決める

「うん。これでよし」

「決まったようですね」

頷く

もともとこうだったらいいなってのはあって、それに具体性を持たせただけなのだから簡単に決まった

彼女は両手を広げ

「さあ、貴方の願いは何ですか？」

ごくりと唾を飲む

これから俺の人生が変わるんだ、緊張しないはずがない  
きっと今度の人生は、つまらないものじゃなくて、すごく刺激的に  
なるはずだから

「僕の願いの1つ目はISに乗れるようになること」

なんてつたつてISの世界に行くのにISに乗れないんじゃ意味な  
いからね

「2つ目にPARADISE LOSTのジューダス・ストライフ  
の戦闘能力が欲しい」

銃を持たせたらあの世界じゃ無敵なんじゃないかと思う

そして最後が一番悩んだことだ

「3つ目にご都合主義をお願いします」

最後まで黙っていた彼女が疑問の声を上げる

「ご都合主義？」

「うん、漫画とかでよくあるなぜか主人公の都合よく物語が進むと  
か、そんなの」

俺が説明すると彼女はなるほどと感心するように頷く



「それで、どうかな？」

おそろおそろ伺うと

彼女は大丈夫だというように微笑み

「3つとも大丈夫なようです」

思わずホツとしていると、彼女は手を差し出して

「今から力を授けます。手を取って下さい」

「あ、はい」

言われ手を握る

やわらかい感触に思わずドキドキする

「すこし体が痛くなると思いますが、我慢してくださいね」

そういわれた瞬間、一瞬全身を静電気が走ったような感覚があった  
ビクンと体が勝手に跳ねるが、次の瞬間には収まった

「はい。終わりました」

そう言われたが、特に変わったようなところはなかった

不思議そうに体を見ている俺を見て

「そんなにすぐには変わりませんよ。変わるのは転生してからです」

なんか拍子抜けした

けどこれで俺も……

なんて思っていたら、彼女は俺の後ろを指し

「あの門を抜けると転生できます」

さっきまで何もなかったのに、いつのまにかでっかい門ができていた  
ここを通ればいいに……

俺は導かれるように門まで進む

門の前まで行くと門がひとりでに開いた

門の中は光で溢れていて中は見えない

けれどもなぜか安心する光だ

進む前にそうだと思いい立ち振り返り、彼女のほうを向き

せめて彼女に

「ありがとうございます！」

精一杯の感謝をした

こんな言葉でしか返せないことを心苦しく思うが、それを彼女は否  
定するように

「どういたしまして」

微笑みを浮かべ手を振った

それに安心して、前を向き進んでいく

やがて視界が光で満たされ……

彼が去った後で彼女は思い出したように

「そう言えば彼に記憶はどうするのか聞いてませんでしたね」

「うっかり忘れていました」

どうでもいいように、けっこう重要なことを呟いたけれど彼女はまあいいかとそう呟き

「新しい生を授かるのです。そこに前世の記憶など必要ないでしょう」

「彼も何も触れなかったことですし」

彼女の基準でそういい、次の選ばれる人間が来るまで趣味の人の世界観察を始めた

そうして彼は記憶がない転生者としてインフィニット・ストラトスの世界に転生することとなった

プロローグ終了

## プロローグ（後書き）

ちなみに主人公は前世の記憶は思い出しません  
消え去ってますから

## 第1話（前書き）

取り敢えずISを起動させるまでを投稿

やはり難しいものですね、話を書くのって

前世の彼と今作の主人公ははつきり言って別人になってます

まあ、記憶ないし育った環境が違うんだから当たり前な話ですが

PS・プリズマのバゼットさんのエプロン越しとはいえ水着姿に興  
奮した人は俺以外にかなりいるはず

## 第1話

### 第1話

2月の中旬、中3のオレと一夏は監越学園の試験会場に向かって寒さに震えながら歩いていく

「うあゝ、さみーよー。こんな日はコタツに限るってのに、なんでこんな寒い思いしなきゃならねーんだよー」

愚痴を言うオレに一夏は寒そうに身を縮めながら、本当は同意したいけど仕方なしに感じて

「仕方ないだろ。会場が4駅離れてるんだから」

「そりゃそうだけどよ。カンニング対策だとしてもよー、もっとやりようはあるんじゃないの」

そうなのだ。どこかのバカが去年の試験でカンニングなんてしたもんだから、今年から試験の2日前に会場が知らされるとか言うおかしなことになっているのだ

しかも、近場の高校を受けたのになぜか4駅離れた場所に会場があるなんて、誰かの陰謀を感じる嫌がらせだ

「俺に言うなよ。そこら辺のことはどっかの誰かが決めてるんだろ  
うからさ」

「へーい」

ま、一夏に愚痴言ったところで、寒くなくなるなんてことはないんだけどよ

けどさ、つい愚痴言っちゃうことってあるよな？  
しかしホントに……

「冬は一夏の家のコタツだよなー」

「うちのかよ！」

「一夏のとこじゃなかったらどこ行けと!？」

「自分とこのがあるじゃねえか……」

疲れたようにため息を吐く一夏  
しかし甘いぞ

「家は年長から追い出される仕組みとなっています」

「世知辛いなあ」

肩をぼんぼん叩かれる

あれ？おかしいな、目の前がぼやけてきた

「って危うく騙されるところだった。お前のとこ結構でかいやつだ  
つたじゃねえか」

「だから甘いと言っているのだよ一夏よ」

人差し指を左右に振り

「まず、コタツはガキ達が占拠している。体まですっぽり埋まっ  
た。もし入ろうとすれば蹴りの嵐が飛んでくるわ」

「あーっと、ストーブ2台あつたる？」

「馬鹿め。ジー様バー様と女性陣が占拠しておる」

もし取り上げたらジー様バー様は凍死してしまう

そして女共の部屋へのストーブを取り上げようとしてみる、いろん

な意味でオレ等が危ない

今の世の女尊男非は関係なく、食事関係を担っている女性陣は権力があるのだ

オレも料理ができなくはないけど、皆からいまいち扱いされてるから任せるしかないのだ

他の男ども？戦力にもなりやしねえ

うちのちっせー坊主どもも日々女性陣から洗脳されてるからな  
いつの世も胃袋を握った奴が一番偉いというわけか

「電気毛布は？」

「あるにはあるが、もう6割が逝かれてて、ほとんど暖かさなんて感じねーよ。ちゃんとしたのなんて女の方に行くからな」

女は体冷やしたらダメだろ？なんて言うのと押し黙ってしまった

ハッ。うちの経済状況舐めんな

今では結構隙間風あって辛いんだぜ

だから家では冬の間、年長男三人の暖房は布団や毛布なのだ

ああ、コタツを占領していたあの子供時代が懐かしい

「だから冬は遊びに行っても入れてくれないし、うちとかに結構な頻度で泊りに来るのか……」

「まーな。わざわざダチに寒い思いさせるわけにもいかんだろ。そのかわり、暖かくなったら来いよ？お前は皆（女性陣）に気に入られてんだから」

前に弾だけ泊りに来たら、ひどいブーイングの嵐があった  
しかも、うちのほぼ全員から

なぜか知らんが一夏はうちの女性陣と子供勢から人気が高い  
あれか？やはりイケメンだからなのか？

さすがに可哀相だったので、ジーさんと3人でやけ酒を飲んだ



いとあわれなり弾

「ああ、わかった」（今皆の後になにか入らなかったか？）

「それとき、わりーけどまた泊めてくれよな」

「しょうがないな。いいぞ」

「よっしゃ！これで千冬さんに一夏公認で会えるぜ！」

「もしかしてそれが目的か……」

なにやら一夏から、うちの千冬姉に近づく奴は…的なオーラを感じる  
まったく、シスコンが

「まったく、シスコンが」

「口に出てんだよ！」

はっ！？オレとしたことが  
だけどさ

「実際シスコンじゃねーか」

違うか？

「違う！ただ千冬姉が心配というか、変な虫が付いたら嫌というか

…」

「なに、心配するな。義弟よ、オレが付いてる」

そう言うで一夏は虫けらでも見るかのような目で見てきた  
それが親友に向ける目か！  
ちよっとした冗談だろうによー

お？

ビビッと指令が来たので上を向く

一夏もなんかあるのかとつられて上を向く

「すまない。紹介が遅れたな」

ふあさつと髪を掻き上げる

「俺の名前は古部杏里<sup>ふるべ あんり</sup>。ただの中学生さ。今は、な」

そう言っつて中空に笑いかける

一夏の奴がなに言っつてんだコイツって目で見てるが無視だ  
<sup>作者</sup>天からの指示だから従わなくちゃならん

「金髪碧眼で容姿端麗で、微笑めば女の子達はオレに惚れちまう」

「まったくオレの体は一つなんだ。オレの隣の取り合いなんてやめてくれ。かわいい子たちが争う姿なんて見たくないぜ」

そしてフツと笑う

それに一夏が突っ込みを入れる

「なに言っつてんだ杏里。大丈夫か？」

本気で心配そうに見てくる  
なに言ってるんだよ一夏。オレはいついかなる時も大丈夫さ  
キラッ

「身長も高く、頭脳明晰、運動神経抜群。神は2物どころか3物4物も与えやがった。困っちゃまうぜ」

一夏が哀れな奴を見る目でオレを見て、肩に手をポンと置き、首を横に振り

「現実見ようぜ」

なんて言いやがった

「うるせえ。非モテの気持ちはリア充のお前には分からのだ！」

普通の日本人的黑髪黒目に顔は十人並み

一夏のようなイケメンではないし、弾のような残念イケメンでもない  
身長は175?で一夏にほんの少し勝ってるが頭では負けてる

この間の模試で一夏はA判定でオレはB判定だったしな  
あとは運動だけど理由があって自分で鍛えてるからできるほうだと思っ

そんな極普通の人間だ

「いや、俺もモテてるなんてことはないだろ」

その言葉に白い目を向ける

鈴や蘭ちゃんも可哀想っていうかなんていうか

「なんだよ？」

「べつつにー。ただ報われんなと思ってな」  
「？変な奴」

お前も大概だけどな

そんなこんなで会場について、試験会場を目指したんだけど

「迷ったよ、おい」

「迷ったなあ」

一夏を見る

オレの視線から逃げるように一夏が目を逸らす

「おい、こら一夏。どこの誰だっけ？こつちだって言ったのは」

「そ、そりゃそう言ったのは俺だけど、杏里も何も言わなかったじやねえか！」

「お前が自信満々に言うからだろ！」

そうなのだ。いい年した野郎2人で絶賛迷子中なのだ

「あーもー、どうすんだよ。早くしねーと試験始まるぞ」

「わかったよ。今度こそ大丈夫だから！」

そう言って先に進んでいく一夏

「大体俺の所為だけじゃないし。こつちのって案内出すだろ普通」

ま、そうだけどな

そこら辺は誰か見つけたら文句でも言おーや

「それにさ、こつちの時、本来は杏里の出番だろ」

「ん？オレ？」

「そうだよ。いつもはすっげー無駄に勘を働かせてるくせに」

「んーそうなんだけどな」

「じゃあやっぱり俺の所為じゃねえじゃねえか」

そついうと一夏はふふんと勝ち誇った顔をする  
が

「今は当てにならんぞ」

「は？」

すぐにキョトンとした顔になる  
ホント顔に出やすいやつ

「だから頼りにされてるところ悪いけど、今は働いてねえんだよ。  
その勘が」

「そりやまたなんで？」

「さあ？たまにあるんだよ。こついうこと」

ま、所詮はあそこから流れ込んだ借り物だ  
何があってもおかしくない

いままでこついうことがなかったわけじゃない  
けど期待してるとこ悪いとは思ってるし、  
実際役に立ってないんだ  
だから

「悪いな」

オレが謝るなんて思ってなかったんだろう  
もしくは冗談の一環として言ったのか  
一夏が目を見開き驚いている

失礼な奴だ

オレが謝ることがそんなに珍しいか

オレだって自分が悪かったのなら謝ることぐらいするさ

この前だって、あー、えーと……そうだ、あれだ！千冬さんに飛びつこうとしてアイアンクローされてごめんなさいしたし、珍しく千冬さんからの電話があった時に冗談（猥談）言ったら二重の意味で切られたから即土下座しながら謝ったぜ

まあ、そんなことは置いといて

オレの謝罪に一夏が気まずそうに

「お、おう」

なんて目を逸らしながら言った

しばし気まずい空気が漂う

しかたないので話題を逸らすために

「しかしあれだな」

「ん？なんだ」

気まづくなった空気を払拭するためか話に飛びついてくる一夏  
オレは目を閉じ、

「ホント、千冬さんのワンダフルボディはけしからんな」

オレにとっての絶対の事実を言った

だってよ、考えてもみるよ

美人でスレンダー、だけど胸は充分すぎるほどある

あのすらっとしたおみ足もたまんねーぜ！

性格も少しきついけど、結構かわいいところあるしね

けれど、一夏はなにが気に入らないのか

「お・ま・え・な」

絶対零度の瞳を向けてきた

やばい、本気の目だ。殺気すら感じる

どこに地雷があったかわからん

だがこうなってしまうては逃げるが勝ちだ

逃げ出すオレに追う一夏

とりあえずと手近な教室に逃げ込む

続いて飛び込んでくる一夏

そしたら

「ん？君たち受験生だよ。早く着替えてよね。時間が押してるんだから。4時までしか借りれないってどういふ事よ、まったく……」

なんて女教師が怒りながら顔も見ずにブツブツ言いながら出て行った  
なんだ？試験で着替え？

カンニング対策にしてもなんかおかしいだろ、それ

「なんだよ。頼りにならないって言うておいて合ってたじゃないか  
よ」

一夏は疑問を感じていないのか、今迄の怒りも忘れたように2つあるカーテンで仕切られたスペースの片方に入って行ってるどころだった

「おい、一夏」

「なんだよ。早くしないと試験始まっちゃうぞ」

「いやそれは確かにそうなんだが」

一夏の言葉にはつきりと言いつ返し返せない  
何かがおかしいとは思っても言葉にできない  
なんと言おうと考えていると

「まあいいけど。急げよ」

仕切りの向こうに入って行く

えーい、ままよともう一つのカーテンで仕切られたスペースに入った

そしてそれに出会った。出会ってしまった

何度かテレビで見たことがある

インフイニット・ストラトス略してIS

しかもこれはラファール・リヴァイブだっけか

人型の飛行パワードスーツで、本来は宇宙で使用されるはずだった  
ものだ

それが兵器へと転用されたがアラスカ条約で禁止され、今では競技  
の1種に使われているものだ

しかしそれにも女性しか使えないって欠陥がある  
それがなんでこんなところに

もしかしてIS学園の試験会場にでも迷い込んだのか  
じゃあ一夏の入って行った場所にも同じくISがあるはず

アイツ変な所で失敗するからな、壊したりしてないといいけど  
一夏の方が心配になり声を掛けようとしたが

「っ……………」

声が出ない

驚き悲鳴を上げようとしたが、空気が漏れる音しか出てこず



今迄変に誘導があつたり、行動が誘導されてきたことはあつたがそれも意志の力で耐えられたが、ここまで体の自由を奪われたのは初めてだった

そしてオレ自身の意思を裏切りISへと近づいていく体  
まるでお前はISに乗る運命だともいうかのように

触れた

ザ

ノイズが走る

「っあ  
」

まるでISに無理やりオレを乗らせようともいうかのように、無理矢理最適化が成されていく

意識に流れ込んでくる情報にノイズが混じっている  
まるでIS自体に意思があり抵抗しているみたいだがそれも時間の問題だった

屈服させられ、蹂躪させられ、書き換えられていく  
オレ自身をもISに適合できるよう組み換えられる

そして全ての処理が終わったのか、クリアになる視界

まるで前からISを動かせたかのように全てが理解できた

一夏の方もISを動かしていることがハイパーセンサーでわかる

そしてこの空き教室の外から複数の足音が近づいているのがわかった

こうしてオレの日常は終わりを告げた

とある某所にて

「ふんふん。いつくんはISを起動してくれたかな」と

そういつて空中投影のディスプレイを数個起動して大量のデータに目を通していく

さらにキーボードも呼び出し高速でそれらのデータを処理していく  
だがあるところまでくるとピタリと手を止めた

「ん、なにこれ？」

なにが気になるのか画面を注視して

彼女の顔が険しくなっていく

そして急いで施設をハッキングして映像を呼び出す

「誰、あれ」

その時の彼女の表情は能面のような顔をしていた

第1話 終了

## 第1話（後書き）

ご都合主義大活躍の巻

主人公に死亡フラグを立ててみた

普通は篠ノ之束が意図しないところでIS乗るやつがいたら興味持つか解剖フラグなんじゃないかと思う作者です

## 第2話（前書き）

これであらかじめ書き貯めといたのは終了です。次回はなるべく早く更新できるように精進します。

前半は少しだけまじめ、というか1カ月の間に彼に何が起こったかの説明回です。

後半は・・・ごめんなさいとしか言いようがないです。

キャラ設定に古部杏里はとある人の影響を受けて紳士道をひたすら突き進むようになったって入れたら思った以上に暴走させてしまいました。

影響を受けたとある人ってのは馬鹿でスケベでパシリな人です。

これでわかった人がいたらすごいけど。

## 第2話

やあ、みなさん

おはようこんにちはこんばんは、古部杏里です

ISを動かしてからこの1カ月ワタクシ、なんと研究所に監禁されております

そんでもってモルモットになっとります

毎日毎日検査検査の連続です

研究員は冷たいというか研究のみに人生捧げてるような奴らばかり  
実際優秀なんだろうけど、こっちが話しかけても無視するってどう  
いうことだよ

ここの警備員も職務に忠実って感じで話もしてくれませんか

娯楽も少なく、テレビは見れるけど情報規制とか何とかで見れると  
ころも限定されてます

正直やっとなめせん

今頃一夏は女の園できゃっきゃうふふしてんだろっとなー

と、一夏といえば、なんで一夏がここに来てないかだけだよ

話は簡単

一夏は後ろ盾が半端じゃないからなんだよね

だってさ、考えてもみろよ

言いたかないけど一夏の姉とその友人がいんだぜ

それだけで十分な力持つてると思わねえかよ

あ、分からない人の為に言うけど、アイツの姉の千冬さんはISの  
第一回世界大会モンドグロツソの優勝者で、素で人間の限界超えて  
るような人、その友人はISの開発者にして大天災（誤字に非ず）  
のあの篠ノ之束博士だよ

ま、アイツだけ自由だとか恨む気はないけどな

アイツもアイツで苦労してるって知ってるし

それに今回アイツがIS乗れたことだって、その篠ノ之博士が関係

してるんだろうしねー

なんでも篠ノ之博士は自分の興味の範囲内にいる人間しか認識してなくて、千冬さんと一夏と妹と両親しか認識してないらしい  
そんなもって愉快犯なんだと

後は分かるよな？

他人なんて知ったことじゃない。身内と楽しけりゃそれでいい  
身内と楽しく過ごすためにはどうすればいい？

簡単だ。巻き込みゃいいってな

ちなみに何で知ってるかっていうと千冬さんの酒の晩酌した時に聞いた。てかそれ関係で愚痴られた

それでな、その時の千冬さんの格好ときたらさ、もうね

オレが来てたからちゃんと服着てただけどさ（普段はだらしないのだと一夏から聞いた。非常に見たいが残念なことに、いままで見れたことない。絶対いつか拝んでやると心に固く誓っている）  
それが酒が進むとね、だんだん着崩れてくるわけよ

わかるか！そのエロさが！

一夏がいるからあんまり見れないんだけど（あんまり着崩れると一夏が直すから）

それでももしかりと心のメモリーに焼き付いて離れない光景を！

こうね、上気した頬と、段々と胸の谷間が見えてくるときなんてさ  
やっぱ大人の色気だよな！

っと、話が逸れたな

偉い人たちもオレと似たようなこと考えたのか、今度はどうしてオレがIS動かせるのかって話になんだよね

オレ自身は千冬さんとも知り合いだし、一夏とは友人だけどさ  
肝心の篠ノ之博士とは会ったことないんだよね

オレに興味を示したってこともないだろうし

……ハッ！まさか、オレに惚れたとか

いやー照れるなー

……はいはい冗談ですよ。んなわけねーですから

とにかくIS乗れる理由がわからんし、特に権力があるわけでもなし  
利用するならもってこいの人物だからこんなところ研究所にいるわけだ  
実際IS動かされてからいろんな人に尋問されてさ  
で、身元がわかったらなんか偉そうな連中に

「君が協力してくれたら施設に多額の寄付金がある。だが、協力  
しなかつたら……」

なんて身内を人質に脅されてよー

「我々も本当はこんな脅迫まがいのことはしたくはないんだ」

とかなんとか白々しいこと言つてやがった

いやーテレビみたいなことって、ホントにあるんですね  
思わず指さして大爆笑してしまいましたよ

お偉いさんの顔が真っ赤になって余計笑えました

あ、もちろん断れないんですけどね

んで、了承した後目隠しされて、この研究所に放り込まれたって訳  
ここまでが研究所に来た理由

そんでもって来たのはいいんだけど、ISに乗れる理由がさっぱり  
わからんのだと

なんでも、オレのデータが無茶苦茶なのが理由らしい

どう滅茶苦茶かっていうと

あるとき測ったデータが、次の日にはまったく違う数値になったり  
するそうだ

あ、暫定的に測ったIS適正值はBだとよ

IS乗った時の反応やらを何とか計算して分かったもんらしい  
ま、あくまで暫定的らしいけど

しかもそんなことが頻繁にあるもんだからアッチとしてはたまった

もんじゃねえだろうな

ケケケ、ざまーみる

と言いたいが、このままだとき、いずれ解剖されそうなんだよね。まじで

貴重なISに乗れる人間だから、手荒なことはされないかもしれねえけど

これ以上IS乗れる男が増えれば分からんけどな

ちなみにあんまりにも進展がないから、ここ半月はISに乗せてのデータ取りとかやってる

ISの知識を深める授業まがいのことも

と、こんなところが近況かな

今の所、娯楽に飢えてる感じ

けど、此処の奴らが用意してくれないんだよね

だから、自分で用意するしかないよね

仕方ないよね

で、今何をしているかというと

時刻は夜

そして女性陣が風呂に入る時間帯

女風呂を覗くた、ごほんごほん

女風呂を覗く輩がいないか警護中です

ここの女共は研究バカしかいないが、美人で良い体してるのが多い



んだよな

そう！だからこそ無法者がいないか探さないといけないんだよ  
だから決して下心とかはないんだよ！

偶然、そう、偶然にも絶好の覗きポイントを見つけちゃったからさ  
ここは紳士なオレが守らないとって思ってたね

わかるだろう？全国各地の紳士諸君も

だからさ……守る時に偶然にも見えちゃっても仕方ないと思うんだ  
そう、これは警備なんですよー

「よっしゃ！入ってる入ってる。うつひょく良い眺め」

いま覗いてるだろって思っただろ？

けど、これも警備の一環なんだよ

だってよ、中に不審者が居たら大変だろ

さ、そんなわけで覗、おほん、警護警護

うへへへへへへ、これで性格も良ければ最高なんだけど

ま、そこら辺は贅沢すぎかね

おゝすつげ。あれFはあるんじゃないね

あつちはちつぱいけど肌白くて綺麗で全然いけるぜ！

ここが、楽園か

ん？もう一人入ってきた

どれどれ、……んー普通っていうか、なんか物足りないっていうか

あれかね、周りが最高級の料理ばかりで一つだけぽつんと普通な  
家庭料理があるって感じかな

普通にも普通なりの味があるんだけどさ

今だけは場違いっていうか

ま、いいもの拝めたことには違いないんだけどね

……あ、目が合った

……えーと、不審者が居たから追わなきゃ  
女風呂から怒声が上がっているが、やはりオレが発見した不審者に  
違くない  
そうしてオレは仕方なく警備場所を離れ、不審者を追った  
仕方なく

で、警護場所から離れ不審者を追って30分後なんだけど  
今この女性陣に囲まれています  
ここだけ聞くとハーレムとかに聞こえるけど、実際はそんなことな  
くて

じーーーーー

むしろ針のむしろです  
なぜかオレがあそこに居たってばれてる  
しかも言い訳もさせてもらえない状況なんだよ  
で、正座で無言の圧力に耐えてる途中だ  
けれどこんな誤解された時のための対処法も完璧だ  
なにしろ、あそこを見つけてから2週間考え抜いた作せ…うおっほ  
ん、警備内容なのだから  
いいか、耳の穴かっぽじってよく聞けよ

「いいのか？オレに手を出して」

女たちは突然の雰囲気の変わりように一歩引いている

決して正座したまま怪しく笑うオレがきしょいとかそんなんじゃないはずだ

…たぶん、きつと

まあいい、そんなことよりこの場を切り抜けることが先決だ

「オレはこの大切な実験体だぜ。下手に手を出したら、もう研究ができなくなっちまうぜ」

ふっふっふ

どうだ！これがオレの考え出した【権力ってすごいよね】作戦だ

これで迂闊にオレに手出しができないはずだ

事実周りはどうしよう、とか研究が続けられないかもとか、どよめいている

あーはっはっはー

すごいぞオレ。これで女風呂覗きたい放題、着替え覗きたい放題だ  
ー！

これで初日のように着替えを覗いてフルボッコとかはないはずだ  
夜這いはしないのかって？

だめだよキミ

これはKENZENな読み物であって、18禁ではないのだから  
いかんいかん。あくまでオレは警備してるんだっ

おっと、そんなことよりも、ここは女達に反論する隙も与えず立ち  
去ったほうがいいな

すばやく正座から立ち上がる

女達が身構えるが、そんなもの怖くもなんともないぜ

悠々と立ち去ろうとする

しかし

後ろから、ガシッ！と肩を万力のような力で掴まれる  
おいおい、まだ何か用なのか？往生際が悪いぜ

「何かな、お嬢さん？つて、なんだ普通ちゃんか」

何でだろう。肩の手の力がより強くなった気がする

正直、肩の骨がミキミキいつてる状態でやばいんだよね  
これ以上力をこめられたら肩が砕けそうなんですけど  
だけどこれ以上は暴力を振るえないだろう

所詮は悪あがきだ

それがオレに届くことはない

だからさ、いい加減離してくんないかな

いや、まじ痛いんだよね

そう伝えても離してくれない

まあ、いいや。で、なんなの？

……え、これはギャグパートだから大丈夫だって？

いやいや、なに言ってるの？

そんなことあるわけないでしょ

オレ暴行されたら言っちゃうよ？

それに、跡が残っちゃうよ？

……初日の時の覗きで殴る蹴るしたけど、治ってた？

あの時もギャグパートだった？

……あれ、そういえばあの時もフルボッコされてたじゃん

なんで忘れてたんだろ

あれー

……え、皆なんでオレを押さえつけて、動けなくしてるの？そして  
なんで拳ゴキゴキ鳴らしてるの？いやいやいや、ダメだよ。オレ世  
界で2人しかいないIS乗れる男だよ。そんなことしたらだめだって

あ、そうだ。それに皆誤解してるようだけどさ。オレはあそこで皆が安心して風呂に入れるように警護してたんだよ。わかる？け・い・ご。だから覗きだなんて酷い誤解なんだよ。確かに誤解されそうな場所に居たオレも悪いけど、それも皆の為を思ってたことなんだよ。わかってくれたかな。…え、わからない？だから、下心なんてこれっぽっちもなかったんだって。むしろ不審者を見つけようとしてたオレが褒められるところですよ。オレが不審者だって？いやいやそりゃないだろうよ。こんなに健気に頑張ってるオレにさー。…え？もういい加減うるさいからやっちまおうって、嘘だよ？そんなことしなぶほおっ！いきなり顔！顔はないでしょっごふうあ！

その後、古部杏里の姿を見た者はいない

ってなるわけねーよ。無茶苦茶ボコられたけど痛み以外10分ほどで治ったけどさ

治るなら体の痛みも治りやがれってんだくっそー！次はぜってーうまくやってやるー！

その日の夜はオレ叫びの音が研究所内に響いていた（うるさいって叱られた）

そんなこんなで夜が更けていくのでした

PS・体を掴まれてた時に、両腕や背中に結構な頻度で柔らかい感触があつて少しだけ気持ちよかったです。

とある学園にて

一人のタイトなスーツに身を包んだ女性がどこかに電話をしていた  
電話はすぐに繋る

「もしもし、私だ……切るぞ」

おそらく連絡先の相手が何かくだらないことを言ったのだろう

そう言いホントに切ろうとする

電話口で慌てた気配が伝わる

女性はため息を吐き

「頼みがある」

真剣な様子でそう頼み込む

この選択がどう出るのか分からない

ある種の賭けだ

そもそも親友であると自負する彼女であっても、電話口の相手が最終的にどう動くかはわからない

あるいはこれが悪手にならないとも限らない

（だが今迄1カ月間どう動けばいいのか探っていたが、そもそも自分が取れる選択などそう多くはない）

（後はあの馬鹿がどうにかするしかない。少しだけ自分の無力さが嫌になるな）

用が済んだのだろう

電話を切る女性

「ふう。弟と同じで世話の焼ける奴だ」

だが、と続けて

「私とて知り合いがいなくなるのは嫌だからな」

そんなことを呟きその場を後にする

こうして事態は進んでいく

おそらく女性が電話をしなくても、事態は進展していただろう  
最悪な方向で

だが親友である彼女の頼みという要素が加わることで事態は分から  
なくなつた

後は電話口の相手と彼次第となつた

第2話終了

## 第2話（後書き）

最後の女性はいつたい誰なのか。

さっぱりわからないぜ！

ちなみに今回女性が動いたのはご都合主義関係なくて、彼女自身の意志です。

ご都合主義も万能ではないという設定です。

ある条件のときのみ効果が強化されます。

PS・今回前書きにいろいろ書いたからこっちに書きます。バゼットさんが数年後にはHollowで見た甘さが無くなるってどこかで聞いたけど、どんな性格になるうとも彼女はかわいいと思う



### 第3話―1（前書き）

取り敢えず初の戦闘シーン投入

むっず！まじでむっずい

何気なく見てたけど皆これをちゃんとした描写で書いてたのか。マジ尊敬します

PS・いつも思うけどアヴェンジャーそこ変われ

バゼットさんとイチヤイチヤすんのは俺だけで結構だ

お前はどっかの変態毒舌シスターと一緒にイチヤイチヤしてろ

### 第3話 1

悲しい誤解が広がった事件から1夜明けて  
いつも通りの夢を見て、この1カ月で習慣になった朝6時少し前に  
起床する

今にも鳴りそうな目覚まし時計を止める  
虚しい勝利を噛み締めながらも素早く起床  
顔を洗い、歯を磨き、着替える

そして本来ならばISの訓練の時にしか使えない演習場へ急ぐ  
演習場への道のりに研究員がいたので気軽に

「や、お早うさん」

片手を上げ挨拶をするも、目でこちらをちらりと見た後、返事もせ  
ずに去っていく

ここの奴らは昨夜のようなことが無い限り、基本的にこんな感じだ  
そう、人間的な扱いをしてほしいから昨日はあんなことをしたのだ  
……ホントだよ？

ため息を吐き演習場へ  
指紋と瞳、そして静脈認証。さらにパスワードに阻まれた演習場へ  
続く部屋のドアをロックを外し開ける

ちなみにこの部屋にISが収納してあるが、訓練の時にしか使えな  
いよう設定してある

そして演習場へと続くドアを開ける  
本来ならばこんな面倒なことはしたくないのだが、中庭がある（監  
視付き）があまり広くないし、何より外に出してもらえないのでI  
Sで全力で動けるほどの広さを持つここを使わせてもらっている  
なんでもIS学園のアーリーナと変わらない広さを持つのだとか

（今日は何か嫌な予感がするから、軽く汗を流す程度に留めておくかな）

こういう時ほど勘は当たるのだ。残念なことに

今回は軽めの運動にしておき、部屋で軽くシャワーを浴び、いい時間なので食堂へ

食堂に入るとなんか研究員たちが集まってぶつぶつと

「やはりあの実験を試してみるしか…」

「だがアレは危険だ。替えはないのだ、慎重に…」

「しかし上がこのままだと納得を…」

「そうだ、このままだと打ち切られて…」

小声でなにかを話し合っている

あの中に入っていく勇氣はさすがにないので、決められた食事を持って離れた席で、一人ぼつんと飯を食う

「はぁー、さすがに寂しいねえ」

やはりどんなにふざけてみても、寂しいものは寂しい

いままでも、こうして1人で食事を取ったことが無いわけじゃないが大抵は家でのわいわい騒ぎながらか、ダチと遊びながらの食事だ

それに、覚悟していたことではあるが、ここまで味方どころか人間扱いされないのは堪えるな

食事を手早く済ませる

食事をすませたら食事休憩をして、今日はISの訓練だ

午後にはなんとアメリカの国家代表との模擬戦があるらしい

だが驚いてばかり居られないのが現状で、移動距離的に日本国内のはずだが、日本の国家代表ではなく、アメリカの国家代表が来る

それが意味するところは、少なくとも2ヶ国以上がこの件に関わっているということだ

わざわざ遠回りでおれに伝える陰険さは恐れ入る

ならば、やはりおれが解放されることはほぼないということだろう

(まいったね、こりゃ)

別にここを抜ける方法がないわけではないが、それをするとな次に危ないのはおれが育った施設のほうだろう

おれの知り合いも、もしかしたらやばくなるかもしれない

そしてここを抜け出しても、世界的に指名手配されるだろう

おれが安全にここを出れて、おれの周りも安全

それは確実に無理だろう

ますます憂鬱になる

だが時間は考えている今も無情に過ぎ去っていく

そろそろ時間的に厳しくなってきたので、もう一度演習所へ行く

ISに、ラファール・リバイブに乗り込む

午前はISの基礎動作から、応用までをこなしていく

最初の時は空を飛ぶなんてことが慣れなくて、壁に激突したり、スピンしながら天井に激突を繰り返していた

今では大丈夫だが

PICやパワーアシスト、ハイパーセンサーなど、やはりISに乗り込むと違和感がある

銃を撃った時もそうだが、反動が相殺されて、反動を計算に入れていたから狙いが大きく外れた場所に撃ってしまう、なんてこともあった

嫌な予感の中したのは午後からだった  
昼食を終え、装備を選び、演習場に入った  
いつも通りのはずだが、何か違和感を覚えあたりを見渡すがいつも  
の演習場だ  
が、少しして気づく

（そうか。誰もいないんだ）

そう、いつもは強化ガラスの向こうに何人かは必ずいる研究員が今  
日に限って誰もいない  
それにこれから模擬戦をするはずだから、データ取りの為に確実に  
いるはずだ  
それが1人もいない  
これはヤバイとスラスタを全開にしてドアへ向かう  
が

「開かない!？」

どうやら閉じ込められたらしい  
そして

「はい。これからテストをするよー」

なんて女性の声が演習場内に響く

思わず姿を探すが、もちろんどこにもいない

「これらに勝てれば、なんとなんと、ここを出ることが出来るよ！  
やったね、いえーい」

その声の直後、直感に従いとつさにISに緊急回避を命じ、横へ飛び退く

その直後に轟音

演習場全体がそれによって細かく揺れる

そしてオレが今までいた場所を演習場の壁を熱線が突き破る

「おいおい、勘弁してくれよ」

ここの壁は、なんでも元々新型の兵器の試射をするために建てられたらしい

故に、本来ならば余程でない限り壊せない造りになっている

それを壊した。しかも一撃で

ならば、今の熱線は避けなければ死んでいた

思わずため息を吐き、アサルトライフルを2丁、それぞれ両手に持つ  
ついでに邪魔なオートロックを外す

そして開いた壁に向けて、いつでも撃てるよう警戒する

煙が晴れ、現れる異形

それを一言でいうならば岩、だった

それも鋼鉄でできた岩

本来のISには不必要な分厚い装甲に、その装甲がスライドして銃口がいくつも覗いている

そして何より特徴的なのが、鋼鉄の岩にくっ付けたようなド太い砲台だ

おそらくあれが演習場の壁を壊したのだろう

そしてそれが下についているブースターで浮きながらこちらにゆっくりと近づいている

（まさかアレがアメリカの国家代表、なわけねえよな）

だとしたらセンスを疑うが

そんな自分でも信じていないようなことを心で呟き、ハイパーセンサーで所属を調べる  
が

敵機、所属不明

返ってきたのはそんな回答だった

所属を隠しているのか、それとも登録がされてないISなのか解らんが面倒なことには変わりない

これは戦いは避けられないだろう

だが結局のところは命を賭けない絶対防御で守られたISの戦いだ  
負けたら何されるか解らんが負けなければいい  
そして姿を見せない誰かが

「それじゃあ準備はいいよね。行きなさい、ゴーレム」

「役に立たないようだったら壊していいから」

ぞつとするような声で告げた

それでオレはようやくこれが命を賭けた殺し合いだと認識し、すぐさま意識を切り替える

慢心をなくし相手を徹底的に壊すことのみに集中する

（ま、もしあの中に本当に人が乗ってて、オレが殺したとしても勘弁だな）

もしそうだったとしても、オレは誰かの死なんて背負わないし、背負えない

自分と周りだけでもう手いっぱいなのだから

まずは先ほどの返礼として、今見えているだけの装甲の隙間に鉛玉をプレゼントする

連続するマズルフラッシュ

全ての弾丸が敵を蹂躪せんと敵に襲い掛かるも

鈍重そうな見た目と違い、素早い動作で装甲が閉じる  
そして

ギキキキキキン！！

傷一つなく全ての弾丸を弾いた

いくら様子見の一撃とはいえ、まさか全て防ぎ、傷一つないとは本当にめんどくせえ

そんなオレの思いなんて関係なく、敵ISは攻撃態勢に移る

装甲がガシャン！とスライドし、見えるだけで25の銃口が覗きレザーと銃弾がブレンドされた弾幕がオレへと降り注いだ

それをISのパワーアシスを全開にして右へ飛び退くことで避ける  
だが避けた先でも足が地につかない内に横の装甲がスライドしまたも弾幕を形成する

それを今度はブースターを全開にして上昇することで逃れる  
だが、次は全ての装甲が開き弾幕がオレを追ってくる

つまり全方位逃げ場がない

実体シールドを展開してもいいが、それでは結局ギリ貧だ  
無駄に装備を消費することになる

巧い者なら機動だけで避けられるのだろうが、IS操縦歴半月のオレにはまだ無理だ



ならどうするのか  
簡単だ

レーザーを避けて銃弾を銃弾同士で弾けばいい  
幸いなことにレーザーは落とせないものの、銃弾は落とせるだけの  
腕前はある

それに全ての弾幕がオレに中るわけじゃない  
避けながらならば自然オレを追い立てるための弾幕と、中てるため  
の弾幕は分けられる

逃げながらレーザーは避け、弾丸は弾きながら余力で時折銃弾を撃  
ちかえす

決して弾切れを起こさないように常に残弾を数えておくことも忘れ  
ない

もちろんマガジン交換は自動で行われる

弾切れになると自動でマガジンが外れ、拡張領域からマガジンが自  
動で銃身にセットされる

今の所銃弾はすべて弾かれているがこの調子でオレにはこれが限界  
だと錯覚させておく

だが声の主にはこれだけでも驚きなのか

「へえ、面白いことができるんだね。ISに乗ったのはわずか半月  
ってデータにはあつたけど」

「けど機体制御が下手だね。いや、むしろ銃の腕前が異常なのかな  
？」

オレを冷静に分析する声に、なぜだか苛立つ

だからか、本当はもう少し油断をさせてから仕掛ける予定を繰り上  
げて今実行することにした

（ハッ、もっと驚かせてやる。そんでもって杏里様素敵って言わせ

てやるぜ！)

そうと決めればやる気もでるってもんだ  
だけどその前に

「おい、あんた！」

「うん？なにかな」

「オレがあんたをもっと驚かせてやる。もしあんたをあつと驚かせ  
ることができたら…」

「へえ、出来たら、何？」

「ぜってーお前の乳揉んでやるからな！覚悟しやがれ！」

「は？」

声の主は少し沈黙した後

「ぷつく、あははははは！なにそれ。面白いじゃない、君」

「いいよ。出来るものならやってみるといいよ」

よし、言質取った

なら絶対生き残ってやる

機体の操縦はいまはこれで限界だし、今はこれ以上必要ない  
今のスピードを維持しつつ実体シールドを2枚召喚  
ほんの少しだけ持てばいい  
敵がシールドを壊さんとより弾幕を降り注いでくる  
その間にマガジンを新しいものに変える

これで準備完了だ

足を止め、フェイントで反対から飛び出す

一瞬だけ弾幕がオレから外れる

そしてあらぬ場所に向かい両手のアサルトライフルのマガジンの半

分を撃ち尽くす

本来なら全て外れているところが、銃弾が敵ISが壊した床、元からあった障害物、そして銃弾同士が弾きあい、およそ3分の2の銃弾が敵のブースターを破壊する

本来の使い手たる彼ならば全ての銃弾を中てているのだろう

いや、彼ならここまで苦戦を強いられることもない

一重にオレの未熟さが原因だ

ブースターを壊され姿勢を崩す敵IS

そこに残りの銃弾すべてくれてやる

精密射撃で一ミリの違いもなく同じ装甲の隙間に、今度こそ銃弾が命中する

命中した部分から小規模の爆発を起こし落ちる敵IS

装備をアサルトライフルからスナイパーライフルへと換装する

それを先日一度成功したばかりの瞬間加速イグニッションブーストを使用し敵機へと接近

なぜ高等技術のはずの瞬時加速をオレが使えたかということ、名前がかっこよかったから練習していたのだ

まさか、それが功を成すとはオレ自身も驚きである

スナイパーライフルを装甲の隙間へと、閉じないように捻じ込むそして撃つ、撃つ、撃つ。マガジンが空になるまで撃ち続ける

ISのハイパーセンサーが敵機沈黙と言うまでそれを繰り返し続けた

場に沈黙が満ちる

どこかから拍手がパチパチと聞こえ

「すごいよ。本当にすごい。驚いたよ」

感嘆したようにオレを褒める声の主

「まさか跳弾までできるなんて驚いた」

「これは君を、古部杏里を舐めて掛かっていた私のミスだね」

「だから、次のはリベンジってことになるかな」

その言葉とともに、敵I Sが壊した壁から何かが異常な速度で演習場に飛び出してくる

第3話 - 1 終了

### 第3話―1（後書き）

かなり長くなるので分けます  
戦闘シーンってこんなでいいのだろうか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1817ba/>

---

詐欺には気を付けよう

2012年1月12日01時55分発行